

質の高い学力を育成する

学習指導案 ハンドブック

—小学校（小学部）編—



令和2年11月

京都府総合教育センター

目 次

はじめに

1	学習指導案の3つの役割	1
2	学習指導案作成の手順と留意点	3
3	学習指導案様式例	6
4	学習指導案の各項目の解説	11
1	対象	11
2	日時	11
3	場所	11
4	単元名・教材名	11
5	単元について	11
6	単元の目標	12
7	単元の評価規準	12
8	指導と評価の計画	12
9	本時の目標	13
10	本時の展開	13
5	学習指導案を今後に生かすために	16
6	学習指導案の具体例	18

はじめに

学習指導案は、授業を構想する際的设计図であり、授業を行う際には進行表となり、実施後には、授業や学習指導の記録、次への構想の準備ともなるものです。また、学習指導案には、単元（題材）の目標や指導上の留意点、評価の観点等、学習指導を進める上で考えるべき重要な内容が含まれています。必要な内容を備え、授業や研究に役立つ機能的な学習指導案を作成することは、充実した授業に直結することであり、児童に質の高い学力を身に付けさせる上でとても重要であると言えます。

本書は、各学校において学習指導案を作成する際の手引きとしての役割を果たすことを一つのねらいとして作成しました。学習指導案には、活用する場面や目的、教科によってさまざまな様式があります。各学校においては、学習指導案の基本的な内容や様式についての共通理解を図った上で、授業の目的や研究課題に応じて、項目や内容を付け加える等、児童の課題や自校の研究課題に合わせた様式や内容を検討し、機能的で創意ある学習指導案を作成されることを期待しています。

また、本書は、校内研修や研究の資料として活用されることをもう一つのねらいとしています。学習指導案について考えることは、その単元（題材）で育む資質・能力を明確にし、それらを実現するために学習指導と評価の見通しをもち、一単位時間のねらいや学習方法の在り方等について考えることでもあります。「学習指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのか。」「その資質・能力を育成するための主体的・対話的で深い学びをどのように設定するのか。」「指導と評価をどのように計画するのか。」等、学習指導の根幹に関わる内容について協議したり研修したりすることは、質の高い学力を目指した授業構想や学習指導のために欠かせないことと言えます。各学校等において、研究授業の一環として学習指導案を検討される際等に、活用されることを願っています。



1 学習指導案の3つの役割

学習指導・授業の設計図

学習指導案を作成することは、育成を目指す資質・能力を明確にし、児童が、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」という授業の内容や手順を具体的に考えていくことに他なりません。

指導者は、年間指導計画に基づいた系統性や単元（題材）の目標、対象となる児童の実態や課題を踏まえて、どのような内容をどのような学習活動を通して指導していくのか、大まかに構想した上で、毎時間の流れと内容を考え、必要な準備をしていきます。指導者は、学習指導案を作成することを通して、その内容や指導方法を事前に考えたり工夫したりしながら練り上げていくことができます。つまり、学習指導案は、その時間のねらい（育成を目指す資質・能力）を達成するための設計図であると言えます。

こうして作成された学習指導案は、実際の学習指導・授業を進めていく際の進行表として働きます。指導者は、学習指導案を基に授業を行うことで、ねらいに即した学習指導を、計画的、効果的に進めていくことができます。

このような機能を担った学習指導案には、まず、よく練られた内容にすることが求められます。さらに、実際の学習指導の進行表となるためには、抽象的な理念を語ったものではなく、児童の学習する姿がありありと思い描けるような具体性が求められます。

児童に「質の高い学力^{※1}」を育成する学習指導を実現するためには、よく練られた、実現可能な具体的なプランが示されている学習指導案を作成することが重要なことであると言えます。

授業研究の資料

公開授業では、授業のねらいや工夫点等、授業参観の観点を明確にしておくことが重要です。また、児童の実態や、自校の研究主題等、あらかじめ周知したいこともあります。このようなとき、学習指導案は共通理解を図るための資料としての重要な役割を果たします。

授業研究の資料として、指導者は何を伝えたいのか、どのようなことを一緒に考えたいのか、自分の考えや思いを明確に打ち出すことが重要です。ただし、共通理解のための資料でもあることから、授業研究に参加する人の実践経験や立場等を考慮して、相手の立場に立った言葉遣いや表現に努めることが大切です。実りの多い授業研究とするためには、ポイントを絞った内容を分かりやすい言葉で簡潔に表現し、専門用語や自校独自の言葉を使う場合は、その語の意味を解説したり、定義付けたりする等、正確に理解できる配慮が必要です。

授業実践・研究の記録

授業を終えた後には、児童の様子や自分自身の指示や発問等の指導を振り返って成果や課題を明らかにすることが必要です。

その際、児童の反応や計画の変更点、反省点等様々な書き込みがされた学習指導案は、授業記録としての役割を果たします。事後研究会では、この記録を基に授業を振り返って、成果や課題、改善点等を出し合い、協議を深めていきます。また、児童の発言記録やノートのコピー、写真や動画等の資料を加え、研究協議での意見や自分自身の考察等を付け加えることで、充実した研究資料となります。自らの授業力を高める上で、授業を終えた後の学習指導案を活用することは、有効な手立てであり、次への構想の準備にもなります。

※1

「質の高い学力」とは・・・

京都府教育委員会では、学力の要素として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む意欲・態度」の三つを挙げ、それらが統合された学力を「質の高い学力」としています。この「質の高い学力」と「育成すべき資質・能力の三つの柱」とは考え方が共通するものです。



2 学習指導案作成の手順と留意点

ステップ1

学習指導要領の確認

学習指導案を考える際には、まず、その学年で児童にどのような資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）を育成するのか、指導の見通しをもつために学習指導要領を確認することが大切です。単元（題材）の目標等については、学校の年間指導計画に明記されていますが、その文言を正しく理解するためにも、学習指導要領や該当教科の解説編に目を通して確認しておくことが必要です。これは、詳細な教材研究を行う前に、ぜひともしておきたいことです。

なお、「単元」とは、いくつかの教材や活動で構成された一連の学習活動を指します。音楽、図画工作、家庭においては、「題材」と言います（以下、「題材」を省略する。）。

ステップ2

児童の実態と課題の分析

育成を目指す資質・能力を視点にして、児童の実態を把握、分析し、課題を明らかにします。

実態把握に当たっては、ノートや作品を見直したり、学習評価のための補助簿を読み直したりする等、具体的な資料に基づいて考察することが重要です。また、学級全体を総括的に見るだけでなく、個々の児童の変容に目を向ける等、多様な見方をしていくことが大切です。

ステップ3

単元の目標・単元の評価規準の設定

単元の学習指導に当たっては、どのような資質・能力をどのような学習活動を通じて育成するのか、単元の目標を明確に設定することが重要です。さらに単元の目標は、児童がどのような学習状況であれば達成できたと判断するのか、そのよりどころとなる評価規準を児童の具体的な姿として設定することで、より現実的なものとなります。

単元の目標と評価規準を設定するためには、学習指導要領に示された目標や内容、児童の実態及び前単元までの学習状況等を踏まえて、必然性のある内容にすることが重要です。年間指導計画においてその単元の目標や評価規準を確認するとともに、年間の系統性や前後の単元との関連についても押さえます。

また、この段階で、単元を中心となる学習活動をおおよそ想定しておくことも必要です。学習活動の最終段階で、どのようなことをどの程度までできるようになることを目指すのか、児童の学習状況を具体的に思い浮かべることで、目標や評価規準に具体性と必然性をもたせることができます。

評価規準の設定に当たっては、国立教育政策研究所発行の『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）」（令和2年3月）を参照するとよいでしょう。この中で、「評価規準とは、観点別学習状況の評価を的確に行うため、学習指導要領に示す目標の実現の状況を判断するよりどこを表現したものである。言い換えると、児童が学習を通して身に付ける資質・能力の状況を、学習評価を行うまとまりごとに、学習内容に基づいて表したものである。」と説明しています。

ステップ4

指導と評価の計画

ここでは、単元の目標を達成するために、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるか」に目を向け、児童の学習活動の流れを中心に据えて、単元全体を見通した指導と評価の計画を立てることが重要です。教科によっては、数時間のまとまりごとに「次」を構成することもあります。その場合も全体を見通した学習活動の構成を考えることが必要です。

学習評価については、日々の授業の中で児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要です。そのため、どの段階で児童の何を捉えて評価するのか、評価規準と実際の学習活動に即した評価方法を計画します。その上で、評価規準に照らして、観点別学習状況の評価をするに当たり記録を取る計画を立てることが大切です。観点別学習状況の評価に用いる評価については、原則として単元や題材等内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行う等、児童全員の学習状況を記録に取る場面を精選し、かつ適切に評価するための計画が重要になります。

評価規準を設定することにより、指導内容を児童の活動のレベルまで具体化することができます。このことは、単元の目標が達成できたときの児童の姿をイメージすることにつながり、指導のための手立てや必要な教材・教具も具体的に思い描くことができます。

実際に学習評価を行う際には、学習の成果だけでなく、学習の過程を一層重視することが大切になります。特に、他者との比較ではなく児童一人一人の持つ良い点や可能性等の多様な側面、進歩の様子等を把握し、児童がどれだけ成長したかという視点を意識しておくことが大切です。

ステップ5

本時の目標の設定及び展開の作成

「本時の目標」を設定する際には、単元における指導と評価の計画との整合性に留意します。基本的には、指導と評価の計画を作成した段階で、各時間の学習内容や評価規準等を考えていますので、それらを基に設定します。

「本時の展開」を考える際には、主体的・対話的で深い学びの視点からの児童の学習活動

の流れを軸にすることが大切です。「各教科等の『見方・考え方』を働かせ、どのような資質・能力を、どのような学習活動を通して育成するのか」という発想で、1時間の学習活動を組み立てていくようにします。そして、児童が学習課題を捉え学習活動の見通しをもって主体的に活動するためには、指導者としてどのような働きかけをすればよいのか、指示や助言、様々な学習形態の活用、個に応じた指導・支援等、様々な手立てを準備しておく必要があります。このような手立てを学習活動の流れと併せて考えておくことで、児童の主体的な学習活動が引き出され、充実した内容で1時間の授業を展開することができます。

ステップ6

本時の評価計画

本時の評価計画を立てる際には、本時の目標と一体的なものとして捉え、育成を目指す資質・能力が、どの学習活動に最もはっきりと現れるのかを考えて計画することが大切です。

1時間の授業のどの場面で、どのような児童の姿が見られると、「おおむね満足できる」状況（評価規準）と判断するのか、また、どのような方法で評価するのか（評価方法）を計画します。併せて、「十分満足できる」と判断される状況と「努力を要する」状況への手立てについても考えておく必要があります。指導と評価の一体化とは、授業の中で、評価規準を用いて的確に評価を行い、指導することであると言えます。「努力を要する」状況にいる児童に対しては、その場で有効な手立てを講じ、支援や指導をする必要があります。

また、指導者による評価とともに、児童による相互評価や自己評価等を計画することも大切です。例えば、本時の学習を振り返る場面で、児童が自身の学びや変容を自覚的に捉えたり互いに認め合ったりする学習活動を行うことにより、児童自身の学習の意欲の向上にもつながります。

このように、児童の学習状況を的確に捉え指導の改善を図るとともに、児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするために、学習評価の在り方は大変重要です。



3 学習指導案様式例

各学校では、この様式例を参考にしながら、授業の目的や公開する対象者に合わせて項目構成や記述内容等を検討し学習指導案を作成してください。その際、児童の実態や研究課題に応じて、項目や内容を付け加える等、一層の工夫を加えることが望まれます。

なお、「4 学習指導案の各項目の解説」において、各項目の内容や留意点を詳しく解説しています。学習指導案についての理解を深める資料として活用してください。

※「特別の教科 道徳」の学習指導案様式については、「道徳教育の進め方 京都式ハンドブック」（平成30年3月改訂版）を参考にしてください。



様式例 1

(1) 〔基本型〕

京都府総合教育センターが初任者・新規採用者研修のために作成している「学校の教育力の向上を目指して―教職の手引き―」令和2年度版に基づいて作成しています。

初任者・新規採用者研修における学習指導案作成の場合は指導教員名も明記します。

〇〇科 学習指導案
 学校名
 指導教員名 *印鑑省略可
 指導者名 (* T 1 . . .)
 (* T 2、T 3) ※複数指導の場合

- 1 対象 第〇学年〇組 〇〇名
- 2 日時 令和〇年〇月〇日 〇曜日 第〇校時 (〇 : 〇 ~ 〇 : 〇)
- 3 場所 〇〇教室、〇〇場、〇〇実習室等
- 4 単元 (題材) 名・教材名

教科によっては、「単元名」を「題材名」とします。

- 5 単元 (題材) について
 (簡潔に記述する。児童生徒の実態についても、単元 (題材) の目標に関連させ、本単元 (題材) での学習課題が明確になるようにする)
- 6 単元 (題材) の目標
 (単元全体の目標を育成する資質・能力の三つの柱に沿って設定する。)
- 7 単元 (題材) の評価規準

単元、小単元、題材等、教科によって学習内容のまとまりの捉え方が異なります。そのまとまりを踏まえて目標を設定します。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文末は「～している。」「～できる。」等	文末は「～している。」等	文末は「～しようとしている。」等

- 児童がどのような学習状況であれば、単元目標が達成できたと判断するのか、その拠り所となる規準を、年間計画に基づいて観点ごとに簡潔に記述する。
- 単元 (題材) の評価規準については、国立教育政策研究所発行の『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』を参照し、適切に設定する。

8 指導と評価の計画 (全〇時間)

次	時	ねらい・学習活動	評価規準 【評価の観点】 〈評価方法〉
一	1 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ○学習のねらいと具体的な学習活動について記述する。 <p>単元指導計画表の時間の区切り (横線) については、各教科の特性に応じて、「次」ではなく、「時」ごとにまとめることも可能です。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○単元の評価規準を具体化し、評価規準と評価の観点を指導過程に即して記述する。 ○単元の評価規準と同様に各校の年間計画に基づいて記述する。 ○指導に生かす評価の機会については「◇」を、児童全体の評価を総括の資料にするために記録に残す評価の機会については「◆」を付けて示し、各観点の評価の機会を精選して記述する。

9 本時の目標（この時間でどのような資質・能力をどのような学習活動を通して身に付けさせるのかを児童の立場で簡潔に記述する。その際、単元（題材）の目標との関連を明確にして、「指導と評価の計画」の該当する時間との整合性にも留意する。）

10 本時の展開（○／○） 本時○時間目／単元全体○時間中
 （本時の目標を達成するための授業展開計画を示す。児童の学習活動と指導の手立てが具体的にイメージできるように記述する。）

過程	学習活動	学習形態	指導上の留意点	評価規準 【評価の観点】 (評価方法)
導入 ○ 分	○具体的な学習活動について、児童の立場から記述する。		○指導者がどのようなねらいでどのような指導を行うのか、指導のポイントを記述する。	
	めあて（本時の目標を達成するための学習課題を児童向けの言葉で提示する。）			
展開 ○ 分	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">過程には時間配分も記入し、見通しをもって指導します。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">一斉、個別、ペア、グループ等の学習形態を記述します。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">児童が主体的に学習活動に向かうためには、指導者の説明を一方向的に聞くだけでなく、多様な学習集団を活用した指導形態を取り入れることが必要です。</div>		<ul style="list-style-type: none"> ○本時の目標を達成するための具体的な手段や方法、指導の工夫点等が具体的に想起できるように記述する。 ○児童の実態や予想される児童の反応を想定して個に応じた具体的な手立てを記述する。 ○教育的支援や配慮を必要とする児童への配慮事項等を記述する。 ○学習形態等の工夫や少人数授業の利点を生かした指導の工夫について記述する。 ○複数指導の場合は、各教員の役割や指導内容の分担がはっきりと分かるように区分して記述する。 ○保健衛生、事故防止、安全管理、準備・片付け等にも触れる。 ○使用する教材・教具等を学習活動に沿って記述する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">おおむね満足できると判断される状況</div> <ul style="list-style-type: none"> ○本時の目標に照らし学習活動に即して評価規準を確認し、評価の観点と評価方法を具体的に記述する。 ○指導と評価の計画の評価規準との整合性に留意する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">十分満足できると判断される状況</div> <ul style="list-style-type: none"> ○評価規準に照らして学習の実現状況の程度から、その高まりや深まりをもっていと判断される状況を想定して記述する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">努力を要する状況への手立て</div> <ul style="list-style-type: none"> ○その時間の学習活動において評価規準を達成することができそうにない児童に対して指導者がその時間内にどのような手立てを講じるのかを記述する。
まとめ ○ 分	学習指導案を作成する段階で、教材や教具を記述しておくことで、計画的に準備をしたり、授業当日に必要なものを確実に揃えたりすることができます。			

様式例 2

(2) 〔特別支援学校・特別支援学級 (各教科等を合わせた指導) 〕

各教科等を合わせた指導の学習指導案作成に当たっては、本学習指導案ハンドブック P1～P18 や、特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編 (小学部・中学部) の「各教科等を合わせた指導」を参照の上、御活用ください。

生活単元学習 学習指導案

初任者・新規採用者研修における学習指導案作成の場合は指導教員名も明記します。

学校名
指導教員名
指導者名 (T1)
(T2)

*印鑑省略可

- 1 対象 第○学年○組 ○○名
- 2 日時 令和○年○月○日 ○曜日 第○校時 (○:○～○:○)
- 3 場所 ○○教室、○○場、○○実習室等
- 4 単元名
- 5 単元について
(単元に関わる児童の実態についても明記する。)
- 6 単元の目標
(単元全体の目標を育成する資質・能力の三つの柱に沿って設定する。)

目標	合わせている各教科等
特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部) を参考に目標を立てます。	例 生活科 [役割][生命・自然] 国語科 [聞くこと・話すこと] [読むこと] 自立活動 [人間関係の形成] [コミュニケーション]

7 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文末は「～している。」 「～できる。」等	文末は「～している。」等	文末は「～しようとしている。」等

○児童がどのような学習状況であれば、単元目標が達成できたと判断するのか、その拠り所となる規準を、年間計画に基づいて観点ごとに簡潔に記述する。

○単元 (題材) の評価規準については、国立教育政策研究所発行の『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料を参照し、適切に設定する。

8 指導と評価の計画 (全○時間)

次	時	ねらい・学習活動	評価規準【評価の観点】 (評価方法)
一	1	学習のねらい、学習の過程及び学習する内容が明確になるよう、児童が実際に行う学習活動に即した具体的な表現にします。	各教科等の相互の関連を図りながら系統的、発展的に学習を展開し評価を進める必要があります。単元を通してどの学習活動で何をどのように評価するのかを計画します。
	2 (本時)		
二	3		

9 本時の目標

(この時間でどのような資質・能力をどのような学習活動を通して身に付けさせるのかを児童の立場で簡潔に記述する。その際、単元の目標との関連を明確にして、「指導と評価の計画」の該当する時間との整合性にも留意する。)

<全体>

<個別>

10 本時の展開 (○/○)

本時○時間目/単元全体○時間中

(本時の目標を達成するための授業展開計画を示す。児童の学習活動と指導の手立てが具体的にイメージできるように記述する。)

過程	ねらい・学習活動	手立て及び指導上の留意点		評価規準 【評価の観点】 <評価方法>
		T 1	T 2	
導入 ○分	めあて (本時の目標を達成するための学習課題を児童向けの言葉で提示する。)			
展開 ○分	<p>「評価」の欄を別に設けることも考えられますが、指導と評価を一体化するために、「本時の展開」中に評価を示しています。適切な評価のためには、「8 指導と評価の計画」の観点か、「本時の展開」のどこに位置付くのかを明確にしておくことが大切です。表の中で学習活動と評価を横並びに示すことで、どの場面において、どの観点をどのように評価するのかが分かりやすくなります。 児童の実態に幅がある場合は、個別に記述することも考えられます。</p>		<p>○本時の目標に照らし、学習活動に即して評価規準を確認し、評価の観点と評価方法を具体的に記述する。 ○指導と評価の計画の評価規準との整合性に留意する。</p>	
まとめ ○分	<p>T 1 : 中心指導としての動き方を記入します。 T 2 : サブ指導としての動き方を記入します。 中心指導者に集中させる、学習しやすい雰囲気づくり、個々の児童の活動への支援等役割があります。そのため、事前に指導者間で丁寧な打ち合わせを行うことが大切です。</p>			

11 配置図

(教師の立ち位置や動線・提示する教材の配置等個々の児童が本時の目標を達成できるよう、必要な環境設定について図示します。)

12 準備物・板書計画等

(必要に応じて、項を設ける場合があります。)

4 学習指導案の各項目の解説

1 対象 ・ 2 日時 ・ 3 場所

番号は様式例〔基本型〕
に対応しています。

研究授業の実施概要として、学校名、指導者氏名、対象とする学年・学級・児童数や、実施日時、場所等を明記します。校内の研究授業の場合には学校名を省く等、公開する対象によって、省略可能な項目もあります。

4 単元名 ・ 教材名

教材名とは、単元に含まれる教材の題名等です。単元名・教材名は、自校の年間指導計画に基づいて記入します。一般的には、教科書の文言を使って記入する場合がありますが、自校の年間指導計画に位置付けられていれば、独自の単元名を設定することも可能です。なお、教材名は、教科によって示されない場合があります。

単元名を設定する際には、「教材名」と混同しないようにすることが重要です。特に国語科では、文章教材の作品名をそのまま単元名としている例（「読んで考えたことを話し合おう」とするところを「ごんぎつね」としている。）が見受けられますので、留意する必要があります。なお、「特別の教科 道徳」では単元名を主題名としています。いずれも、学習指導案のタイトルとも言えるものです。学習活動のねらいや内容が一目で分かるように明記することが重要です。

さらに、教科にもよりますが、学習指導案を作成する上で、内容のまとまりや単元で指導する事項の内容を明らかにしておく必要があります。

5 単元について

この単元で、どのような資質・能力の育成を目指すのか、そのためにどのような学習活動を行うのか、単元全体のねらいや学習活動の概要を説明します。主に次のような内容で構成します。

- ① これまで児童は、どのような学習をして、どのような資質・能力を身に付けてきたのか。（系統性）
- ② 本単元（当該の学年、指導時期）では、どのような資質・能力の育成を図ろうとしているのか。（単元の目標）
- ③ 本単元でねらいとする資質・能力を育成するために、どのような学習活動をどのような流れで行うのか。（指導と評価の計画）
- ④ 学習内容や教材の特性に関わって、特に留意すべきことは何か。（内容のまとまりの明確化又は本単元で扱う事項の明確化）
- ⑤ 本単元の学習で身に付けた資質・能力を、次へどのように活用し、発展させることができるようにするのか。（指導の見通し）

単元の目標や内容を考える際には、学習指導要領の該当箇所を確認し、それを根拠に具体化していく必要があります。また、学校の研究課題等に基づいた研究授業の場合は、上の内容に関連させて、研究の主題や仮説等に触れておくことも必要です。

児童の実態は、この項目に含めて記述します。その際には、学級や担当の児童の一般的な様子（明るい・素直・仲がよい等）ではなく、本単元の目標や学習内容から見た現状や課題を具体的に記述します。例えば、「話し方を工夫して、自分の考えを話す。」というねらいを設定したとき、「日常的に朝のスピーチに取り組んでいるが、人前で自分の考えを話すことに苦手意識のある児童が多い。」や「ペアで話したり聞いたりして交流する場を設定する。」「話す事柄をカードに書き出して話す順を並べ替える活動を行う。」等のように、児童の実態と、それに基づいた指導を明確に示します。ただし、児童の課題を記述する際には、個人情報保護の観点から、個人を特定できるような記述は避ける必要があります。特に、教育的支援や配慮を必要とする児童について記述する時や、少人数の学級で個人が特定されやすい場合等は、十分に配慮した対応が求められます。さらに、ホームページ等で学習指導案や研究資料を公開する際には、不特定多数の人々の目に触れることを想定して、十分な注意が必要です。

なお、児童の実態については、例えば「児童について」として、「単元について」とは別項目を設けて記述することもできます。

6 単元の目標

学習指導要領の目標や内容、児童の実態及び前単元までの学習状況を踏まえて、この単元で、どのような資質・能力をどのような学習活動を通して育成するのかを、資質・能力の三つの柱ごとに、三文に分けて記述したり、資質・能力の三つの柱に沿って、一文程度で記述したりする方法があります。

なお、文末は、教科・領域の特性に応じて「～する。」「～できる。」「～できるようにする。」等、いくつかの形式が考えられます。いずれの場合でも、一つの学習指導案の中で混在しないよう、国立教育政策研究所の参考資料等を参照して、学校として統一した表現にすることが必要です。

7 単元の評価規準

目標の実現の状況を判断するよりどころとなる規準を作成します。各教科においては「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の観点ごとに記述します。

なお、文末は、児童の学習活動の状況を示すことから、「知識・技能」の観点については、「～している。」「～できる。」等、「思考・判断・表現」の観点については「～している。」等、「主体的に学習に取り組む態度」の観点であれば「～しようとしている。」等とします。

8 指導と評価の計画

単元の目標を達成するために、どのような学習活動を展開するのか、観点別の学習状況についてどのような時期や場面で評価するのか、指導と評価の計画を一覧表にして示します。

次・時

単元の学習活動全体を、いくつかの単位時間ごとにひとまとまりのものとした区切りを「次」と呼びます（教科によって「小単元」と呼び、区切りだけを付けて名称を付けないこともあります。）。例えば、単元全体の導入に当たる部分を「第一次」、学習活動の中心的な部分となる部分を「第二次」、学習成果を発表・交流したりする部分を「第三次」と設定する等が考えられます。

このようにして「次」を設定することで、指導者は、学習活動全体を見通した視点で指導に当たることができます。また、児童にとっては、学習活動の節目を意識することで、この時間に学習していることが次にどのようにつながるのかという見通しをもつことができます。

ねらい・学習活動

一単位時間又は一次ごとのねらいと具体的な学習活動について児童の立場から記述します。具体的な学習活動とは、何を、どのように学習するのかということであり、例えば「会話の内容を基に人物の気持ちを想像し、吹き出しに書き込む。」や「乗法の答えは、累加で求められることを理解し、図に表す。」等、児童が実際に行う学習活動に即した表現にすることが大切です。教科によっては、主要発問やゴールとなる「身に付けたい概念（結論）」等を併記する場合も考えられます。

評価規準・評価方法

この欄には、指導過程に即して、一単位時間又は一次ごとに、児童がどのような学習状況であれば「おおむね満足できる」状況であると判断するのか、そのよりどころとなる評価規準を評価の観点及び評価の方法と併せて記述します。児童全員の学習状況を單元ごとに総括するために「記録に残す評価」については、指導と評価の計画のどの場面で行うかを適切に位置付け、明記するようにします。

9 本時の目標

この時間で、どのような資質・能力の育成を目指すのか、本時の目標を設定します。

本時の目標は、「指導と評価の計画」の該当する時間との整合性にも留意する必要があります。「指導と評価の計画」を基にして、できるだけ一つの文にまとめるように簡潔に記述します。

10 本時の展開

一単位時間の詳細な学習指導計画です。児童の学習活動と、指導者の指導の双方が具体的にイメージできるように、流れに沿って記述します。このとき、「本時の目標」（どのような資質・能力を育成するのか。）と、「学習活動」（どのような学習活動を行うのか。）、さらに、「学習評価」（どのような学習状況であれば目標が達成できたとするのか。）の三つが相互に関連し、そのつながりが明確になるように設定されていることが重要です。

めあて・ねらい・課題

児童が主体的に学ぶために、本時の目標を達成するための学習課題を児童向けの言葉で提示します。例えば、本時の目標が、「説明したい仕事内容を、相手に具体的に伝えるために写真を選び、写真と文章の構成を考える。」とすれば、児童に提示する「めあて」等は、「リーフレットの写真を選び、写真と取材メモを合わせて伝えたいことを決めよう。」というようになります。

「めあて」等の提示は、授業の導入部分で単元の学習計画を確かめたり、前時の学習を振り返ったりする等の学習活動を通して行います。

過程

一単位時間の授業をいくつかの分節に区切ったものです。一般的には、「導入」、「展開」、「まとめ」の三つで組み立てる場合が多いです。「学習課題をつかむ」、「調べる」、「考えをまとめる」等、学校独自の区切り方や文言を設定する場合があります。

過程を設定する際には、児童の立場から授業全体を見通して実際の学習活動の流れを想定することが大切です。また、それに即して、時間の目途を設定しておくことも重要です。指導者、児童ともに、一単位時間の授業の流れをはっきりと知っておくことで、児童自身が学習活動の流れを自覚的に捉え、見通しをもって主体的に学ぶことにつながるものと考えます。一般的な型に縛られず、学習活動の目的や内容に即して、学習活動の過程を柔軟に創意工夫することが大切です。

学習活動

本時の目標を達成するための学習活動について、児童の立場から具体的に記述します。児童が教師の説明や講義を聞いたり、個人やグループで活動に取り組んだり、学級全体で互いの考えを交流したりする等、いくつかの学習活動を組み合わせて構成します。児童が実際に行う学習活動に即した表現にすることが大切です（「8 指導と評価の計画」の「ねらい・学習活動」も参考にしてください。）。

学習形態

授業の中で、どのような学習集団を設定して学習を進めるのか、その形態を学習活動ごとに記述します。

児童が主体的に学習活動に向かうためには、指導者の説明を一方向的に聞くだけでなく、児童一人一人が主体的に活動する場面を設定することが重要です。そのためには、グループやペア、個別等、多様な学習集団を活用した学習形態を取り入れるようにします。ただし、多様な形態を設定することが、そのまま主体的な学習活動に直結するわけではありません。その形態で、何をどのような目的で行うのかを、児童が具体的に理解できるようにするとともに、十分な活動時間を設定することや、児童が指導者に頼らず自分の力で活動できるよう手順や進め方を事前に十分指導しておくこと等、ていねいな手立てを講じておくことが大切です。

指導上の留意点

指導者がどのような指導を行うのか、指導のポイントを記述します。本時の目標を達成するための手段や方法、工夫点等が具体的に想起できるような表現を心がけることが大切です。

なお、個に応じた指導についても、児童の実態を想定して具体的な手立てを記述しておきます。教育的支援を必要とする児童への配慮事項等も、この欄に記入します。

また、安全管理、教材・教具、準備・片付け等についても、必要なことをこの欄に記述します（本時の展開に「教材・教具」欄等を別に設けることもあります。）。

評価・評価の観点・評価方法

この欄には、「おおむね満足できる」状況を示した「評価規準」と「評価の観点」に加えて「評価方法」も併せて記述します。その際、指導と評価の計画の評価規準との整合性に留意することが必要です。

なお、一単位時間の授業の中には、様々な学習内容が含まれていますので、どの学習活動を捉えて評価するのか、焦点化を図ることが重要です。

「評価方法」は、児童のどの学習活動を対象として、どのような方法で評価するのかを記述します。ノート、ワークシート、学習カード等学習成果が客観的に残る資料を分析して評価する場合と、発言の内容、話合いの様子等を観察して評価する場合等があります。観察の場合は、児童の学習状況が把握できるように、授業のどの場面で、何をポイントとして観察するのかを明確にしておくことが必要です。

また、この欄には、「十分満足できる」と判断される状況と、「努力を要する」状況への手立ても記述します。

「**十分満足できる**」と判断される状況は、評価規準に照らして学習の実現状況の程度から、その高まりや深まりが見られると判断される状況を想定します。その際、「より深く」や「より詳しく」等の抽象的な表現は避けて、評価規準に何が加われば、質的な高まりや深まりが見られる状況なのかを具体的に想定して記述するようにします。例えば、「『話すこと・聞くこと』において、相手に伝わるように行動したことや経験したことに基づいて、話す事柄の順序を考えている。」という評価規準に対して、「行動したことや経験したことに基づいて、聞き手に与える印象や効果も考えながら、話す事柄の順序を考えている。」等が考えられます。

「**努力を要する**」状況への手立ては、本時の学習活動において評価規準を達成することが難しい児童に対して、指導者がその時間内にどのような手立てを講じるのかを具体的に考えて記述します。学習課題について、どのようなつまづきが予想されるかを具体的に想定し、それに応じた適切な手立てを準備しておくことで、的確な指導を行うことができます。そのためには、「ノートの見直しをさせる。」等のように抽象的な内容にとどまらず、「ノートを見直して前時に解いた問題を再度思い出させる。」等、児童の実際の学習活動につながる手立てにすることが、指導と評価の一体化を図る上で重要であると言えます。

なお、「**十分満足できる**」状況を「A」、「**おおむね満足できる**」状況を「B」、「**努力を要する**」状況を「C」等のように記号で表記することもあります。その際には、欄外に注記を付す等して、記号が表す意味に誤解が生じないよう配慮することが求められます。

＜参考図書・資料＞

- 『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（小学校、中学校）
（令和2年3月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）
- 「学習評価の在り方ハンドブック（小・中学校編）（高等学校編）」
（令和元年6月 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター）
- 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（平成31年3月 文部科学省）

* 上記の資料の一部は、文部科学省、国立教育政策研究所のホームページからダウンロードすることができます。

5 学習指導案を今後に生かすために

授業を準備していく段階で練り上げ、当日には、進行表としてその役割を果たした学習指導案ですが、実施後にも有効に活用していきたいものです。

そのためには、実施後に授業の記録と指導者の考察を付け加えることと、学習指導案の修正や改善を行っておくことが必要になります。

授業の記録

授業の記録として残しておきたい物には、逐次発言記録（授業中の児童生徒及び指導者双方の発言を記録したもの）、児童生徒のノートやワークシートのコピー、児童生徒の制作物、授業で使った教材、写真、録画映像、事後研究会の記録等があります。これらを全て揃えることには、時間と労力を要しますので、同僚の協力や研究部等の組織的な取組の有無等の条件を考慮して、可能な範囲でいくつかを選択して記録を残すこととなります。校内の研究体制を活用して、組織的に取り組むことが望ましいですが、無理な場合は、児童生徒のノートやワークシートだけでも残しておくといよいでしょう。返却が必要な物は、映像データとして残しておくことも有効です。

こうして収集した記録物は、できる限り早い段階で手際よく整理しておくことが必要です。集めた記録資料の中から、児童生徒の変容や、授業の成果が確認できる物を選択し、研究会等の資料として提供できる形に整えておきます。

整理した記録物は、研究会の資料や授業のまとめとして実際に活用することが重要です。集めて残しておくだけでなく、その資料を使って考察したり、説明したりすることで、改めて授業を振り返り、成果や課題に気付くことにつながります。また、活用することで必要な資料を絞り込んだり、関連付けたりする等、資料の整理を一層進めることができます。資料を整理し、学校として保管しておくこと、共有財産となり次年度の指導に利用することができます。

指導者の考察

授業を振り返っての考察は、単元目標が達成できたか、つまり、ねらいとしていた力を児童生徒に身に付けさせることができたかを中心にを行います。自分自身の振り返りや事後研究会等からは、様々な視点からの成果や課題が挙げられます。それらのうちから研究課題と単元目標に関わることに焦点化してまとめておくことが大切です。箇条書きにしてまとめる場合と、文章化しておく場合があります。研究成果を紀要にまとめる場合には、授業を振り返っての考察を文章化しておきたいものです。

考察の柱としては、次のような内容が一例として考えられます。

ア 評価の結果 … 単元もしくは本時の学習指導を終えた段階で、どれほどの児童生徒が、評価規準に至ることができたか、また、それはどのような資料や姿から判断できたのかを、できる限り客観的に分析・記述します。

イ 成果とその要因 … 評価の結果、成果と認められることは何か、児童生徒の変容（できるようになったこと、よい方向で変化したこと等）を具体的に挙げます。その上で、その成果が得られた要因はどこにあるのかを探り、学習指導案に示された学習活動の工夫や指導方法等から具体的に指摘します。

ウ 研究成果の普遍化 … 研究授業から得られた成果やその要因から、指導の在り方や

方法について気付いたことや考えたことをまとめます。その際、今回の研究授業で得られた個別の事例を基に、他の単元や教科の指導にも当てはめることができるような理論や方法に一般化、普遍化して考えることが重要です。

エ 今後の展望 … 今回の学習指導をよりよくするためには、何を、どのように改善すればよいか、明確にします。「さらに努力したい。」「一層の改善を図る。」等の抽象的な表現に終わらず、研究成果をどのように生かしていくか、具体的に述べることが重要です。

学習指導案の修正・改善

事後研究会や指導者自身の振り返りを基に、学習指導案を修正・改善しておきます。学習指導案のどこをどのように修正するのか、具体的に明らかにしておくことは、指導者自身の授業力の向上につながります。また、学校として授業研究に取り組んだ場合には、修正された学習指導案が研究の成果として残り、次年度の授業改善に役立ちます。紙資料としての学習指導案に加除修正を朱書きしておくことでも十分ですが、修正したものを電子媒体として保管しておくことで、学校の共有財産とすることができます。授業研究の成果を生かした学習指導案の修正をもって、一連の授業研究を終えることになります。



6 学習指導案の具体例

算数科学習指導案

学校名 ○○立○○小学校
指導者名 ○○ ○○

- 1 対象 第3学年1組 ○○名
- 2 日時 令和2年9月○日（水曜日）第5校時（13：30～14：15）
- 3 場所 第3学年1組 教室
- 4 単元名 あまりのあるわり算

5 単元について

教科の系統性と指導の見通し

本単元は、学習指導要領第3学年の算数科の内容「A 数と計算」の(4)「除法」を受けて設定したものである。

児童は、第2学年において、数量の関係に着目し乗法の意味や計算の仕方を考えたり計算に関して成り立つ性質を見いだしたりするとともに、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりすること等を学習してきた。

第3学年では、第2学年での学習の上に乗法の逆算である除法について学習する。前単元では、除法の意味と乗法九九を1回適用してできる除法（余りのない場合）の計算を学習してきた。

本単元は、「あまりのあるわり算のしかた」と「あまりを考えて」の2つの小単元からなっている。既習の割り切れる除法と同様に乗法九九を用いれば計算できることや、余りはわる数よりも小さくなることを捉えることができるようにすることがねらいである。また、余りについての捉え方を深め、場合に応じた余りの処理ができるようにし、日常生活の様々な場面でも使えるようにすることもねらいとしている。

本単元で学習したことは、第4学年の「1けたでわるわり算の筆算」、「2けたでわるわり算の筆算」、「小数のかけ算やわり算」へと発展していくことになる。そのため、本学年において、除法の意味を正しく理解し、計算の技能を確実に身に付けるよう指導することが大切である。

本単元で育成を目指す資質・能力と学習活動

本単元においては、割り切れない場合、つまり、余りのある場合も除法として捉えることができるように、除法の意味を拡張していくことが重要である。

そこで、本単元においては、除法に関わる数学的活動を通して、次のような資質・能力の育成を図っていくことが求められる。

- (1) 既習の除法と関連付けて、余りのある場合の除法でも九九を使って答えが求められることを理解し、余りと除数の大きさを比較して両者の関係を一般化して捉えること。
- (2) 除数と商がともに1位数である除法の計算が確実にできること。
- (3) 計算に関して成り立つ性質を見いだすことにより、その性質を活用して計算の結果

を確かめようとする態度を育むこと。

- (4) 日常生活の問題を解決し、得られた結果を吟味する数学的活動を通して、日常の事象を数量の関係に着目し、筋道を立てて考えるとともに、得られた結果を常に振り返って吟味しようとする態度を育むこと。

学習内容や教材の特性と留意点

多くの児童が、今までに、あるものを何人かで数が等しくなるように分けたり、あるものから同じ数ずつ取り去ったり、同じ数ずつ袋に入れたりする経験をしてきていると思われる。

本単元では、このような日常生活で起こる等分除や包含除の場面の問題を、具体物や図、式で考え、その結果を確かめたり、それを表現し伝え合ったりする学習活動を通して、除法の意味や余りについて理解するとともに、日常生活の様々な場面においても、除法を活用して問題を能率的に解決できることに気付かせていきたい。

特に、除法で解決した結果余りがある場合には、日常生活の場面に即してより適切な答えを考える必要がある。このような日常生活における事象を算数と結び付けて考えたり処理したりする活動を通して、児童は、数学的な結果がそのまま日常の事象での答えになるとは限らないという認識のもと、元の事象に立ち返り、その妥当性を検討する必要があることに気付くとともに算数を学ぶよさを実感できるようになるのではないかと考える。

6 単元の目標

- (1) 割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し、それが用いられる場合について知り、その計算が確実にできる。
- (2) 割り切れない場合の除法の計算の意味や計算の仕方を考えたり、割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。
- (3) 割り切れない場合の除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき、生活や学習に活用しようとしている。

7 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 包含除や等分除等、除法の意味について理解し、それが用いられる場面について知っている。	① 除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現している。	① 除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現しようとしている。
② 除数と商がともに一位数である除法の計算が確実にできる。	② 余りのある除法の余りの処理について日常生活の場面に応じて考えている。	② 除法の場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている（わり算探しなど）。
③ 割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。		

8 指導と評価の計画 (全8時間)

次	時	ねらい・学習活動	評価規準 【評価の観点】 (評価方法)
一	1	○包含除で余りのある場合の除法の意味を理解する。 ・既習をもとに、余りがある場合でも除法を用いてよいことや答えの見つけ方を具体物や図等を用いて考える。 ・余りのある場合の除法の式の表し方や、余り等用語の意味を知る。《あまり、わり切れる、わり切れない》	◇除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現している。【思考・判断・表現①】 (活動観察、ノート分析)
	2	○除法の意味に着目し、余りはいつも除数より小さくなることを理解する。 ・除数と余りの大きさの関係を調べる。	◇割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。【知識・技能③】(ノート分析)
	3	○等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。 ・等分除の場面で、答えの見つけ方を考える。	◆除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現している。【思考・判断・表現①】 (活動観察、ノート分析)
	4	○割り切れない場合の除法計算について、答えの確かめ方を知る。 ・除法の操作や計算の仕方をもとに、余りのある除法の答えの確かめ方を考える。 (除数)×(商)+(余り)=(被除数)	◇除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度①】(活動観察、ノート分析)
二	5 (本時)	○日常生活の場面に当てはめたときに、商と余りをどのように解釈すればよいかを考える。 ・余りを切り上げる場合と切り捨てる場合について、それぞれ考える。	◇余りのある除法の余りの処理について、日常生活の場面に応じて考えている。 【思考・判断・表現②】 (活動観察、ノート分析) ◆除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図等を用いて表現しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度①】(ノート分析)
	6		
	7	○学習内容を適用して除法の問題を考えたり、解決し合ったりする。	◆除法の場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。【主体的に学習に取り組む態度②】(ノート分析)
三	8	○学習内容の定着を確認する。 (評価テスト)	◆包含除や等分除等、除法の意味について理解しそれが用いられる場面について知っている。【知識・技能①】(ペーパーテスト) ◆除数と商がともに一位数である除法の計算が確実にできる。 【知識・技能②】(ペーパーテスト) ◆割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。 【知識・技能③】(ペーパーテスト) ◆余りのある除法の余りの処理について、日常生活の場面に応じて考えている。 【思考・判断②】(ペーパーテスト)

※「評価規準・評価方法」の「◇」は指導に生かす評価、「◆」は記録に残す評価とする。

※評価方法については以下のとおり。

○活動観察：机間指導等を通じて捉えた児童の活動の様子、話し合い時の児童の発言、ノートの記述等に基づいて評価する。

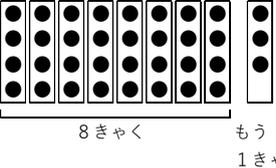
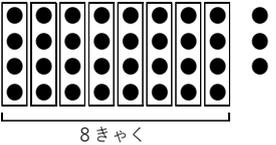
○ノート分析：授業後に児童のノートやワークシート等を回収し評価する。

○ペーパーテスト：単元で学習した知識や技能の内容が定着しているかを評価する。

9 本時の目標

- 日常生活の場面に応じて、余りを切り上げて答えを求めることを、図や式や言葉を用いて説明することができる。

10 本時の展開 (5/8)

過程	学習活動	学習形態	指導上の留意点	評価 【評価の観点】 〈評価方法〉
導入 10分	<p>○本時の学習問題を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>35人の子どもが、長いす1きやくに4人ずつわっていきます。</p> <p>みんながすわるには、長いすが何きやくいりますか。</p> </div> <p>○めあてをつかむ。</p>	<p>一斉</p> <p>一斉</p>	<p>○わられる数を伏せて問題を提示しわられる数が4の倍数なら既習のわり算で解けることに気付かせ、解決の見通しをもたせる。</p> <p>○わられる数(35)を挿入し、問題場面を捉えさせる。</p> <p>○問題文に着目させて、既習の問題文との問い方の違い(商と余りを問うていない。)に気付かせる。</p> <p>○見通しをもたせるために、余りが出てしまうことを確認する。</p>	
<p>みんながすわるには、あまりをどうすればよいのか考えよう。</p>				
展開 30分	<p>○問題の解き方を考え、問題を解く。</p> <p>・予想される児童の反応</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>※余りを切り上げて正答を求めている。</p> <p>[式] $35 \div 4 = 8$ あまり 3</p> <p>[言葉] みんながすわるためには、いすがもう1きやくいるので、答えは9きやく。</p> <p>[図]</p>  </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>※計算はできているが、図や言葉で説明していない。</p> <p>[式] $35 \div 4 = 8$ あまり 3</p> </div> <p>○ペアで自分の考えを伝え合い、互いの考えを確認する。</p>	<p>個別</p> <p>ペア</p>	<p>○式と答えだけではなく、考えの根拠を図や言葉でもかくことを確認する。</p> <p>○図がかきこみやすいワークシートを準備して、個に応じた支援を行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>※余りを切り捨てて答えを求めている。</p> <p>[式] $35 \div 4 = 8$ あまり 3</p> <p>[言葉] 8あまり3だから、答えは8きやく</p> <p>[図]</p>  </div> <p>○互いの式や図を読み取らせ、どのように考えて答えを出しているのかを考えさせる。</p>	<p>◇余りを切り上げて答えを求めることを、図や式や言葉を用いて説明している。</p> <p>【思考②】 〈活動観察、ノート分析〉</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「十分満足できる」と判断される状況</p> </div> <p>○余りを切り上げて答えを求めることを、図と式と言葉を関連付け説明している。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>「努力を要する」状況への手立て</p> </div> <p>○ワークシートを用いて図をかかせ、その図をもとに余りの処理の仕方を確認させる。</p>

	<p>○全体で考えを交流する。</p> <p>○本時をまとめる。</p> <div style="border: 1px dotted black; padding: 5px;"> <p>みんながすわるためには、のこりの3人がすわるいすがもう1きやくいります。だから、あまりを切り上げて8+1で答えは9きやくになります。</p> </div> <p>○適用問題に取り組む。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>ドッジボールが11こあります。</p> <p>1回に2こずつ運ぶと、何回で全部運べますか。</p> </div>	<p>一斉</p> <p>一斉</p> <p>個別</p>	<p>○図や式や言葉を用いて説明させる。</p> <p>○余りの処理について、問題文の「みんなが」という言葉と関連付けて考えさせる。</p> <p>○この問題で、答えが9脚になるのは子どもが35人以外にもあるのか考えさせ、商と余りの関係や余りの処理の仕方を捉えさせる。</p> <p>○余りの処理について、図や式や言葉を用いて説明させる。</p>	
<p>ま と め 5 分</p>	<p>○本時を振り返る。</p> <p>・今日の学習のまとめを「あまり」という言葉を使って文章に書く。</p>	<p>個別</p>	<p>○本時の学習を通して、分かったことや、友達の考えに納得できたところ等を「あまり」という言葉を使って書かせ、本時を振り返らせる</p>	

質の高い学力を育成する
学習指導案ハンドブック
—小学校（小学部）編—

令和2年11月
編集・発行 京都府総合教育センター
京都市伏見区桃山毛利長門西町
TEL 075-612-3266